

<翻訳>画家シンザブロウ・タケダ：
素晴らしい動物たちと独特の美的解釈

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2021-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: マリア・テレサ, ファヴェラ・フィエロ, 有村, 理恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028386

〈翻訳〉

画家シンザブロウ・タケダ： 素晴らしい動物たちと独特の美的解釈⁴⁵

マリア・テレサ・ファヴェラ・フィエロ、有村 理恵 訳

1. はじめに

竹田鎮三郎は、1935年、陶磁器の産地愛知県瀬戸市に生まれる。1947年、故郷でまだ中学校に通っていた頃、当時まだ若い美術教員であった伊藤高義（1926－2011）と出会い、画家として生きることを決心する。また、1921年から1936年までメキシコで文化芸術活動を行った後、帰国し、瀬戸市に移り住んだ造形美術家北川民次（1894－1989）とも親交があり、1950年代末、より間近でメキシコ芸術を学ぶよう勧められる。この北川の助言に加え、1963年、ある一冊のメキシコの写真集に深い感銘を覚える。メキシコへ旅立つ折、竹田は友人らにある約束をする。「北川先生の15年の滞在期間より一年長くメキシコで暮らすからな。」⁴⁶メキシコの太陽、美術、文化に魅了された竹田は、今も尚その魅力に心惹かれている。

1963年から1977年にかけて、竹田はほぼメキシコ全土を巡り、異なる先住民コミュニティを訪れる。その文化に感銘を受けた竹田は、村の祭りや習慣を絵に表現していき、土着の人とより身近に接することを強く望むようになる。油彩「水浴図」（1976年）（図1）は、ディエゴ・リベラ（1886－1957）の壁画「テワンテベックの水浴図」⁴⁷を連想させる。子どもたちや女性たちが一緒に水浴しており、衛生且つ遊びの日でもある。作品右上のイグアナは、受け入れること、無限の喜びを表し、絵画全体から受ける印象とも一致している。また、

⁴⁵ 本論文は、2021年2月16日の静岡大学とメキシコ日本芸術文化常設セミナー共催によるオンライン国際セミナーでのマリア・テレサ・ファヴェラ・フィエロによる口頭発表をまとめたものである。

⁴⁶ Yuko Kawahara. *Adopción y conservación de los colores entre Japón y México. La influencia de la cultura en el arte japonés y las influencias de la cultura japonesa en el arte mexicano.* (芸術デザイン博士論文), Facultad de Artes y Diseño, UNAM, México, 2015, p. 190.

⁴⁷ ディエゴ・リベラのモザイク壁画「テワンテベックの水浴図」（1956年、メキシコシティ・Museo Soumaya Plaza Carso）https://mosaicosenecianos.com/portfolio_page/museo-soumaya/（最終閲覧日2021年4月22日）

中央上部に母豚とその子どもたちが描かれ、左上のコンゴウインコの部分には「私の元に歌と言葉をさえずりに来てくれるだろうか」と表記されている。メキシコの風習をテーマにした作品において、壁画家ディエゴ・リベラの画風に着想を得ていることを竹田自ら認めている。



図1 竹田鎮三郎「水浴図」(1976年) 油彩キャンバス

竹田がメキシコに移住するにあたり、同国外務省から滞在先を明らかにするよう求められ、宿泊先を提供してくれたのは、ルイス・ニシザワ画伯であったとのことだが、竹田との出会いについてニシザワ画伯は、1992年、次のように語っている。「魂の師匠である北川民次の肖像画や絵を通して、すでにメキシコのビジョンを持っていました。メキシコのあらゆるもの、とりわけ、プレヒスパニック美術や壁画に魅了され、30年前からこの地の広く長い道を巡礼し始めました。とりわけ、メキシコ人の習慣や真心により、目が細く、無口であるけれども、説得力のある笑顔の竹田を兄弟のように受け入れてくれました」⁴⁸。

1964年、サン・カルロス芸術アカデミーで絵画講座を受講し、夜間に国立グラフィックアート学院でリトグラフを学ぶ。また、同年から13年間にわたり、国立世界文化博物館で画家・グラフィックアーティストとして勤務する傍ら、子どもたちを対象に土曜絵画教室も開く。人類学者・考古学者をはじめ、異な

⁴⁸ Luis Nishizawa, *Takeda contra Herrera* (展覧会カタログ), Gobierno del Estado de Oaxaca, México, 2013, p. 19.

る分野の専門家たちとの交流により、メキシコの先住民文化をより深く学ぶ機会にも恵まれる。

1977年、同博物館を辞めることを決意し、メキシコ全国を旅してまわる。そうして、最終目的地となるオアハカ州北部ミステカ地方に少しずつ近づいて行く。竹田は、この地域の地形・考古学・芸術・民芸品・動物相・植物相に魅了される。そこには、メキシコの他の場所にはない深い魅力と独自性にあふれていると感じたためだ。これらの要素は全て、後に竹田の作品のモチーフとなる。オアハカ市郊外に位置するサン・アンドレス・デ・ウアヤパンという小さな村に拠点を置き、先住民コミュニティと共存し始める。竹田は「日本文化とオアハカ文化には共通の意識とアイデンティティがある」と確信していた。「日本人の起源も農業にある。自分は農家と陶芸家の息子であり、それらの日本人の考え、そして、メキシコ人の考えを学んできた。互いの考え方を理解することで、自分の作品を生み出すことにつながった。」⁴⁹

1970年代末からオアハカ州立自治ベニート・フアレス大学芸術学校で教鞭を執り、版画・絵画・デッサンの指導を行い、学生たちを励ますだけでなく、元教え子たちが成功を取めることができるようサポートする。そのおかげで、今では、著名な芸術家となった人もいる。第一回シンザブロウ・タケダ・ナショナル版画ビエンナーレは、竹田自ら考案し、元教え子たちより支援のもと2008年開幕された芸術祭であるが、現在でも続けられている。

長年のメキシコ滞在中、竹田は、メキシコ・日本・アメリカ・ヨーロッパで100以上の個展・共同展を行い、その造形作品により、数多くの賞を受賞した。その中でも際立つのは、1977年、メキシコ文化普及における功績が認められ、メキシコ外務省より「アギラ・デ・トラテロルコ賞」を授与したこと、1996年5月9日ワシントン州シアトル市長によりシンザブロウ・タケダの日が制定されたこと、メキシコでの教育者・芸術家・文化プロモーターの経歴が高く評価され、2012年、明仁天皇により瑞宝中綬章を授与されたことが挙げられる。

2. 造形作品のテーマ

竹田は、自分の周りを取り巻くすべてのものを芸術作品に変容させ、日本人

⁴⁹ Randy, B. Hecht, "A method of living". Interview. *All Nipons Always Magazine*, noviembre de 2011. En Lauro Flores, "Arte y migración: Takeda y sus discípulos", Universidad de Washington, Seattle, EUA, Carteles editores, Oaxaca, 2012, p. 8.

の視点からそれらを解釈する。また、メキシコのプレヒスパニックや民俗伝統を取り戻すことは重要であると考えている。竹田の作品では、大地の力を象徴する女性や動物の表現に、官能的でエロチックな要素を見出すことができる。

また、大半の絵画・版画において、人物や動物たちは、ある一定の方向を向いている。古代エジプトやシュメールの表象のように側面から描かれており、魔術的・象徴的意味が込められている。また、構図を軽くし、動きを出すため、四分の三の角度から描かれている箇所もある。その一例として、「オアハカの家族」(2014年)(図2)という作品を挙げるができる。この絵の主人公たちは、まるでマジックリアリズムの人物であるかのように宙に浮かんでいる。



図2 竹田鎮三郎「オアハカの家族」(2014年) 油彩キャンバス

この一種の行列、もしくは踊りには、鶏、老人、シカの仮面をかぶった人物、ワニが描かれている。鶏は、他の家畜や動物と共に、スペインの船に乗ってアメリカ大陸にやって来た。メソアメリカ文化では、鶏は食糧であることに加え、様々な意味がある。東洋の国々では、鶏は重要な表象であり、勇敢さ・優美さの現れであるだけでなく、深い象徴的な意味合いがある。庇護や知恵を表す鳥でもあり、日光の表象でもある。同作品では、鶏はメキシコの伝統と結びつけられ、人間と自然の保護を意味している。

老人は、メソアメリカの神話・伝説・逸話において知恵を表し、現在でもその意味は変わらない。次に、シカの踊りについてであるが、これは、スペイン征服以前から、先住民の間で行われていた儀式である。この踊りは、シカの狩りをドラマ化したもので、狩り人たちにとって、シカは文化的英雄の象徴であ

る。シカの仮面を被った人物は、その動物に魂を乗っ取られたような動きをする。メソアメリカ文化では、日本文化と同様に、自然は生命の源と見なされ、大変重んじられている。よって、儀式には、母なる大地に許しを求めるといった深い意味が込められている。次に、女性が数人描かれ、一人は肩にコンゴウインコ、もう一人は、頭の上に七面鳥を乗せ、自転車に乗っている若い女性はイグアナを抱いている。右端に、筋肉質の巨大な女性が行列の最後尾を守っている。

竹田は、いろいろな人間を描くことで、日常にある意味を持たせている。「川の上で」(1980年)(図3)という木版画では、フチタンの川での水浴の習慣を描いている。川は水浴や洗濯の場であると同時に、荷物を担ぐ動物たちの水飲み場でもあり、周りには植物が生い茂っている。



図3 竹田鎮三郎「川の上で」(1980年)木版画

サポテカ文化では、ワニは神聖視されたトーテム崇拝の動物であり、大地と関連づけられている。聖なる樹木カポックノキを支える動物で、「ワニの地」(2006年)(図4)という油彩画では、カポックノキは世界を表し、崇拝の対象でもある。慎重に判断しなければならないことだが、ワニは竹田自身を表しているのではないだろうか。この大胆な主張の根拠は、竹田の作品や描かれている表象の中で、ワニは優勢な位置を占めており、先頭に立ち、グループをまとめ、地元オアハカの人々(芸術家及び一般の人々)に加わっている。また、先に述べるように、ワニ(もしくは龍)は、日墨両国の文化において、象徴的な意味を持っている。

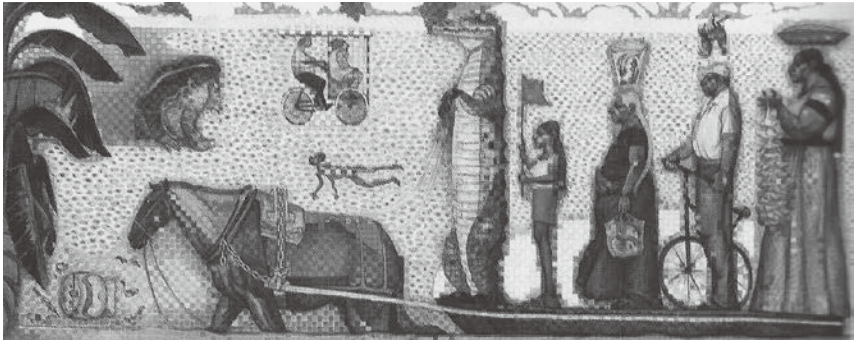


図4 竹田鎮三郎「ワニの地」(2006年) 油彩キャンバス

オアハカの南部に位置するテワンテペック地峡では、聖なる巡礼地がいくつかある。中でも、傑出している巡礼地の一つであるゲ・ラ・ベネエ(ワニの家)は、サポテカの人々にとって、トーテム崇拝の地であり、聖なる動物に捧げられた最後の聖地であったが、月日の経過とともに風力発電施設となってしまった。

「三人のシウンカス」(2013年)(図5)については、サポテカ語で、家族の中で一番下、甘やかされているという意味を持ち、女性に対する愛称である。着飾った衣装、その優美な物腰、龍神にも似た竹田のお気に入りのワニに支えられた首の長い女性たちが目に留まる。日本の神話や神道でも、幻想的な実体を見出すことができるが、日本美術における龍神の表象の一例として、歌川国貞画「釈迦八相記今様写絵」が挙げられる。龍は海の力を表しており、その上に釈迦が描かれている。



図5 竹田鎮三郎「三人のシウカス」(2013年) 油彩キャンバス

メキシコにはシャーマン・祈祷師・妖術師の伝統があり、村や町ではどこでも「自分の服か肌か」と表現がある。「真昼のナワトル人」(1988年)(図6)という作品では、ナワトル人が、半分人間・半分動物(フクロウ、ジャガー、ワシ、コヨーテ)に変容する能力を表している。密林の中で踊り、耳付きキャップをかぶって、子どもたちは大人の真似をしている。



図6 竹田鎮三郎「真昼のナワトル人」(1988年) 油彩キャンバス

サントウンガというのはオアハカ州の伝統的な踊りのことで、ソンとサパテアードから構成されるトナディーリャという歌曲から生み出された。「ああ、サントウンガよ」(1988年)(図7)という油彩画では、金飾りのついた豪華な衣装で着飾ったテワンテベックの女性たちが、セラグヅツァ祭り、ヒカルペストレと呼ばれる花と小さな旗で飾られたひょうたんを奉納する。牛は繁栄を表す動物であり、絶え間ない労働と決断力に、その象徴的意味が反映されている。よって、精神的な美徳を表しており、牛と一緒に描かれた人たちには、深い知識と忍耐があることを意味している。



図7 竹田鎮三郎「ああ、サントウンガよ」(1988年) 油彩キャンバス

美術評論家の中には、竹田は、タヒチに住み、現地の女性を描いたポール・ゴージェンと類似点があると指摘する人もいる。行列の最後尾にジャガーの仮面を付けた男性がいるが、メソアメリカ、とりわけ、メキシコ南西部では、ジャガーの表象は頻繁で、人間もしくは動物のポーズで描かれ、また、人間もジャガーのアトリビュート(属性)を持って表された。ジャガーの毛の模様は、満天の星の夜を表し、メソアメリカ文化では、冥界の入り口と関連づけられている。ジャガーの踊りは、プレヒスパニック文化に起源を持ち、トーテム崇拜のジャガーの二面性、つまり、守り且つ神であるという古代の信仰に着想を得た儀式である。

「七面鳥の精神」(1990年)(図8)という油絵では、竹田は様々な習慣や伝統を組み込んでいる。音楽、織物作業、「トリート(牛)の踊り」、イグアナと一

緒にいる大きな土着の裸婦、そして、中央にこの作品のテーマである七面鳥が描かれている。色彩は印象的で、色が充満しており、満ちあふれる造形は、私たちの目から入り、魂の奥深くまで浸透していく。七面鳥は盛大な祭りで使用され、メキシコのいくつかの地域に根付いた風習では欠くことのできない大変価値のある動物である。



図8 竹田鎮三郎「七面鳥の精神」(1990年)油彩キャンバス

最後に、竹田は、賢明にもメキシコ文化に溶け込み、模倣し、オアハカの知的環境において重要な役割を果たしてきた。あるインタビューで、オアハカ文化における竹田の地位について尋ねたところ、冗談を交えながら回答した。先生は「私の血はもうすでにメスカルだ。」と声高く叫んで言った。これは、オアハカ地方を代表するアルコールで、日本の酒みたいなものである。

〈参考文献〉

DE LUNA, Andrés, *Cincuenta años de Shinzaburo Takeda*, Universidad Metropolitana Unidad Xochimilco, México, 2015.

HECHT, Randy B., “A method of living”. Interview, *All Nipons Always Magazine*, noviembre de 2011. En Lauro Flores “Arte y migración: Takeda y sus discípulos” Universidad de Washington, Seattle EUA, Carteles editores, Oaxaca, 2012.

NISHIZAWA, Luis, *Takeda contra Herrera*. (展覧会カタログ) Gobierno del

Estado de Oaxaca, México, 2013.

KAWAHARA, Yuko. *Adopción y conservación de los colores entre Japón y México. La influencia de la cultura en el arte japonés y las influencias de la cultura japonesa en el arte mexicano.* (芸術デザイン博士論文) Facultad de Artes y Diseño, Universidad Nacional Autónoma de México, México, 2015.

TSUKADA, Yoshiko. *Tres pintores japoneses y sus expresiones en el México contemporáneo. Encuentros y construcciones de las identidades en el arte.* (美術史博士論文) Universidad Autónoma del Estado de Morelos y Centro de Estudios Casa Lamm, A.C., 2009.

Un pintor japonés está en plena floración México: exposición de Shinzaburo Takeda. Conmemoración de 50 años de estancia en México. (展覧会カタログ) Museo de Arte de la Ciudad de Minami Alps. Yamanashi, Japón, 2014.